

調査報告

トロス司教座聖堂発掘報告(二〇一四) —考古学・建築上の知見から—

浦野 聡

キーワード

ビザンツ 聖堂 モザイク 内陣 祭壇

二〇一四年夏、トロス司教座聖堂発掘チーム¹⁾は、まず七月二三から二六日と八月五・六日)、聖堂南側廊外側の附属礼拝堂で、トルコ隊が二月に着手していた作業を引き継ぎ、聖堂の外拝廊や内部戸口の敷居石のレヴェル(四七二・七五五m)まで一・二mほどの厚さの瓦礫と堆積土を除去して整地した。その結果、礼拝堂自体を三つの小部屋(東から順に**礼拝堂第1**、**3室**: Ch. room1-3)に分かつ二つの壁体(仕切り壁**A**・**B**: PW A, B)、また礼拝堂の西側では、外拝廊からクロノス神殿方面に抜ける通路(南**西通路**: SW Path)、²⁾さらにその西側に二つの小部屋(東から順に、**仕切り壁C**: PW C)により分かれたる**南西第1**、

第2室: SW room 1-2。但し**南西第2室**は観光客用の遊歩道の下になっいて発掘できず)の存在を確認した(写真1)。

同期間、南翼廊東側に視認された壁体(EOWとSOW)についても南東隅の位置を確定し、その輪郭を明らかにしようとしたが、隅石が原位置から動いてしまっており、確定できなかつた。ただ、東面の壁体はアプシスの東端面の延長上に築かれている一方、南面の壁体も、概ね翼廊の南端面の延長上に築かれていたように見受けられる(写真2)。

ラマダン明けの休暇を数日はさみ、八月一日から南翼廊

第7室の、地表面から数十cmに築かれた二×三mほどの台状の煉瓦積み構造体を発掘した。これは、その規模や形状等から家族墓ではないかと推定されていたものであるが、東西ほぼ同じ大きさでふたつに分かれた区画からは、人骨や副葬品等は、青銅製のピンセットを除いては見いださ

れず、結局、その可能性は排除されないものの、墓であったかどうかも不明となった。平行して八月三日から二八日まで、**内陣(祭壇部)**の床面を出し、傷みの激しい象嵌モザイク(オプス・セクティール)舗床の調査・記録・保存作業を行う一方、身廊北東、隅床面に一m×二m程度の

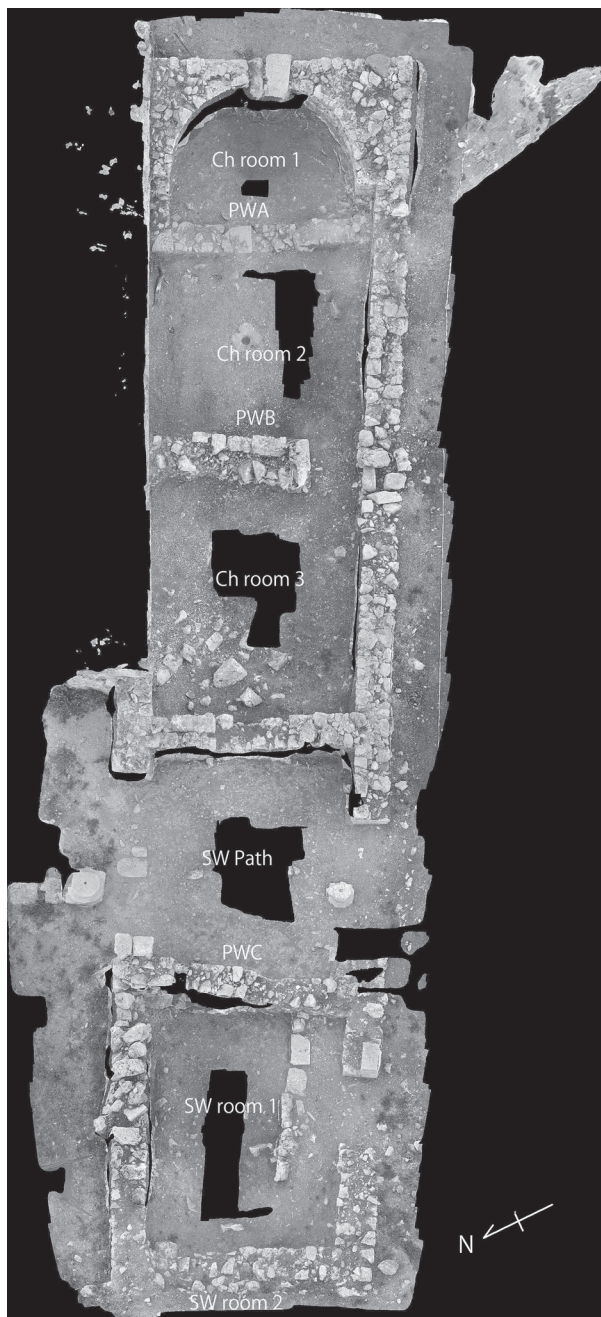


写真1 附属礼拝堂と周辺施設

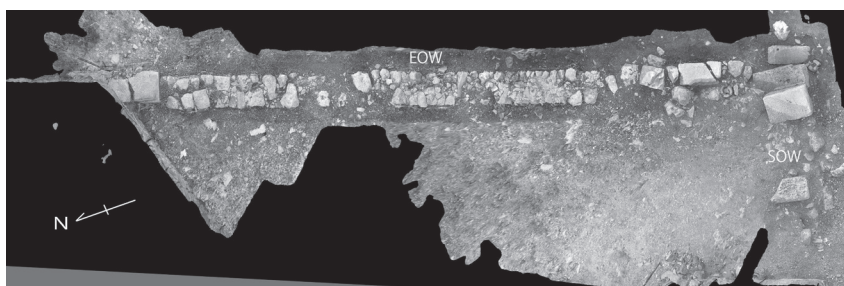


写真2 南翼廊東側の壁体 EOW と SOW

試掘を行い。床面モザイクを確認・調査・記録・保存した。床面については、テデスキの調査報告に詳細を譲り、本稿では、建築面に関わる所見を主として記すこととする。

1 附属礼拝堂と周辺施設

附属礼拝堂は、聖堂の南側廊南外壁を自らの北側壁として共有する一方、アプシス北面や北西部角等の接合部においては、聖堂それ自体から構造的に独立している。それゆえ、礼拝堂は聖堂躯体より後の建設になるものと考えられる。すでにトルコ隊は、古代末期に属する銀銅貨一点と青銅貨三点、一一世紀の銅貨

一点を、礼拝堂の地表面から発見していた（本号村田報告参照）。南側の空き地が、一時、放牧地ないし果樹等の作付け地となっていたことから、聖堂の南外壁に沿う礼拝堂の周辺は牧畜や耕作に邪魔な瓦礫等の廃棄場所となっていたものと考えられ、この場所、この層位から見つかった貨幣を礼拝堂の建設・使用年代の手がかりとすることはできない。ただ、二〇一一年にクロノス神殿のポディウム上からビザンツ中期の彩釉陶器が見つかっており、また一四年、神殿の玄関階段最下段あたりで、キリストと十二使徒を意匠とする聖水容器の抜き型や貝殻、動物骨が見つかったことに照らし（いずれも未公開）、この南側が、古代末期とビザンツ中期に工房その他の施設を有していたであろうことは、これら貨幣の年代ともあわせて、容易に推察できる。

礼拝堂は、アプシス部とそれ以外の部分を分かち、さほど厚くない仕切り壁Aと、残りの部分をおよそ半々に分かち、厚い仕切り壁Bにより、おそらく後代に三分された（写真1）。いずれの仕切り壁も礼拝堂の躯体と構造的に独立しており、施工技術に劣るだけでなく、取り付けにおいても正確に直角を取る配慮が十分なされていない。仕切り壁Aは入り口があったと思しき中央付近に若干のくぼみを呈しているが未だ構造の詳細は不明である。仕切り壁Bは、北から礼拝堂横幅全体の四分の三程度のところで終わって

おり、残りの四分の一の隙間は**礼拝堂第2室と第3室間**をつなぐ空間を構成したものと考えられる(写真3)。礼拝堂の**西側外壁 ChWOW**には入口が確認されるけれども、この入口は後代に完全に塞がれた形跡を残す(写真4)。それが塞がれた後の入口は、**仕切り壁B**の延長上の**南側外壁 ChSOW**の石組みが崩れている場所、すなわち2室と3室の連結空間に開けられていたものと見られるが、礼拝堂それ自体の床面レヴェルを未確認の本年度においては不測の破壊を招く危険を避け、崩れた石材の除去を取りやめた。

発掘の現況において、**礼拝堂第1室と第3室**について特

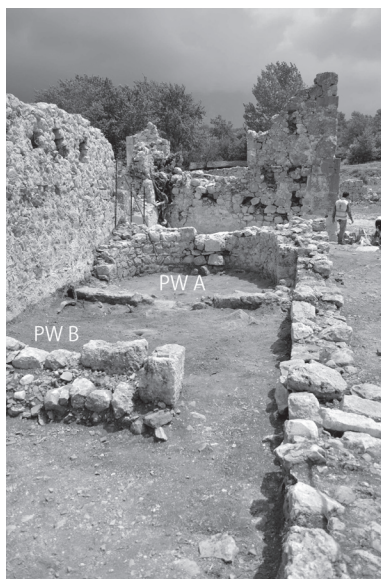


写真3 仕切り壁A(奥)・B



写真4 礼拝堂の塞がれた入り口(西→東)

記すべき点はない。床面を出すまで所見を待ちたい。他方、礼拝堂第2室のほぼ中央に、元々はコリント式柱頭であったものを加工し、その頂部に直径一八cmほどの円形の切り穴を開けた石が据えられているのが発見された(写真5)。現況でその上面のみを露出させているこの石は、その位置から見て、おそらく切り穴に丸太の心棒を差し、そこに横木で取り付けられた重しをすり鉢上にロバなどの小型の役獣をもって回転させて搾油するオリブ絞り機等の台座石と



写真5 割り穴を持つ台座石

して据え付けられたものであろう。三室を分ける仕切り壁とこの台座石が一連の目的を持って設置されたのなら、礼拝堂はその際に役畜の使用や農産物の加工を伴う農場関連施設に転用されたものとみなしてよい。この台座石が現状のように土に埋められて用いられたのか、あるいは床に直置きされて使われたのか等ははっきりしない。ただ、現況地表面には生活痕は確認されず、なお瓦礫が堆積しているように見受けられるので、前者の可能性は薄からう。

いずれにせよ、柱頭を割って用いたか、あるいは床面を掘り抜いてこの台座石を埋めたのではない限り、床面は、通常のコリン

ト式柱頭の高さ、すなわち六〇cm以上は下にあるものと予想される。もしそうした推測が当たっていれば、礼拝堂の床面は、戸口敷石レヴェルとほぼ等しい聖堂の祭壇部や身廊部より、それだけ低く作られていたものと考えられる。確認のためにさらなる発掘を待ちたい。

礼拝堂の入り口がもともと面していた外拝廊からの通路は、外拝廊とクロノス神殿方面を連結するたんなる通り道であったというわけではなさそうである。すなわち、礼拝堂の北側と南側の外壁の延長部分、および**南西第1室**の北と南の外壁の延長部分が、それぞれ通路の北面と南面に袖壁を作っているからである（写真6）。袖壁は、屋根を支えるなど壁の強度を高めるためか、門扉を取り付けるなどしてこの空間を外拝廊側からもクロノス神殿側からも区切られた空間として構成するためのものであったらう。この通路は、礼拝堂が機能していた際にもこのような形であったなら、礼拝堂の屋根付き前室ないし玄関ポーチ、あるいは屋根なしの前庭であった可能性があり、礼拝堂の入り口が閉じられて他の目的に転用されて以降は、何らかの作業場としての役割を持たされた空間であった可能性がある。

この**通路**には、発掘を停止した外拝廊の敷居石のレヴェルで踏み固められた跡があり、小さな動物骨、ガラスや土器の細片がこの層位から見つかっている。後代、おそらく



写真6 通路(南→北:柱礎列の左手に石の列がある)



写真7 南西第1室(西→東)

この空間使用の最終局面での生活面と考えられる。礼拝堂内部の生活面はまだ確認できていないので、**礼拝堂第2室**のオリブ搾油機(?)の使用時との相対的な年代の前後関係は不明とせざるをえない。この**通路**には外拝廊側とクロノス神殿側の両方の開口部の中央付近に、古代の柱礎や祭壇型墓碑(写真は本号所掲の師尾報告、図4を参照)の転用材が据えられていた。据えられた位置から見て、車止めのような役割が想定されるが、祭壇型記念碑は頂部をすり鉢状に加工されており、手水鉢等としての用途を持たされていたものと思われる。なお、通路中央部には、南北方向に壁体の痕跡とも見られる、比較的大きな石の列が見受けられる。これが壁体の痕跡であれば、この空間は幾度か再編成を被ったものと考え得るし、袖壁の意味合いも変わってくるが、それが実際に構造体の一部であるかどうかの確認は今後の発掘を待たねばならない。

南西の二室については、**南西第2室**が、壁のごく一部以外、現在の遊歩道の下にあって発掘できないのに対し、**南西第1室**はその全体の発掘が可能であった。後者の発掘の結果、南に開けられた戸口から入ったところに階段のステップ一段分ほどの石組みの痕跡が現れた(写真7)。これについては、手押し車を室内に入れることを可能にするためのスロープ、風除け室を画するための壁の基礎、ある

史苑(第七五卷第二号)



写真8 南西第1室東側壁(東→西)

いは以前の構造物の壁体基礎など、様々な可能性が考えられるが、時代によっても用途に相違があったかもしれない、特定は困難である。

なお、**南西第1・2室**の北側壁と南側壁は厚さ、施工技術、設置方位において礼拝堂の外壁と共通性・一貫性が見られ、それと同じ時期の建設になる可能性が高い。その一方**南西第1室**の東側壁は薄く、繋ぎ材に使用されている礫石が小さくモルタルも少量であることから、後代に設置されたものであるろう(写真8)。礼拝堂と併せ、この周辺施設のオリジナルの全体像を得るにはさらなる発掘を要する。

2 家族墓と想定された構造物

聖堂南翼廊第7室において、昨シーズン、床面からの高さ四〇五〇cm、幅二九五cm、長さ一九〇〜二〇〇cmの、東西に長いほぼ直方体の構造物が確認された。昨年の報告ではこれを「プラットフォーム」と呼んだが、その規模から、ふたつの個室を持つ家族墓、ないし、二人の、相互に関連の強い聖職者を埋葬した墓ではないかと推定された。この構造物を**第5号墓**・**T5**と仮称する(以下では、墓であるという先入見を避けるため**T5**と呼ぶ)。

T5は、幅三五cm内外の煉瓦積み外郭で囲われ、内部も幅三五cmほどの、同じく煉瓦積みの仕切り壁によって、西

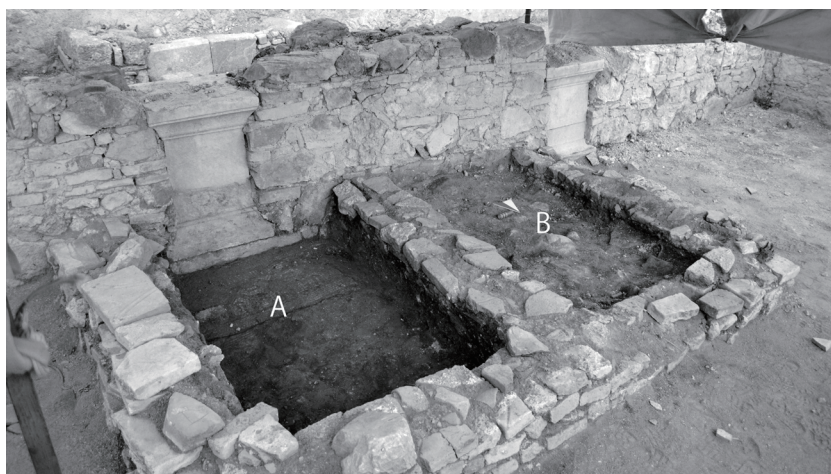


写真 9a T5 (発掘途中)

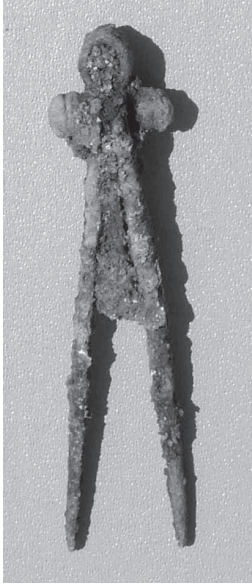


写真 9b ピンセット

と東、ほぼ同じ大きさの二つの部分に分かたれている（それぞれ東から幅一〇〇cmのA区画と幅九〇cmのB区画…写真9a）。これら両区画は、墓であるならば槨室とも呼べるような大きさであるが、構造上、T4と異なるのは、南翼廊の床面より下のレヴェルにまで掘り込まれた墓室はなく、翼廊の床面をそのまま底としていた点である。A区画では、かなりよく保存された南翼廊のオリジナルのモザイク床面が現れ、西のB区画では、ごく一部を除いて白いモルタルが床面の上に塗られていた。内部はT4の場合よりランダムに瓦搏や煉瓦、石材が詰まっております、人為によるというよりは自然崩落により埋まったものであるかもしれない。人骨は出ず、人工物は、長さ六cmの青銅製のピンセットがB区画の底に近いあたりで見つかった（写真9b）。発掘の現況からは、これが墓であったと断定することは



写真 10a T5 A区画



写真 10b T5 B区画

もちろんできないが、かといってその可能性を否定することもできない。とくに葬られていたのが重要な聖人であった場合には、聖堂放棄前に遺骨や副葬品が完全に取去られて他に移されたということもありえたらうからである。他方、ちようど水槽が二つならんだ形のこの構造物をそうした用途の施設と見なすことはできない。モルタルが防水のそれではなかったからである。この構造物を下部構造として上部に木組みのクローゼット、ないし物置がしつらえられていたという可能性はある。その場合には、この構造物から全く人骨が見つからない代わりに齧歯類の骨が多数見つかった(松崎報告参照)ことの理由も説明が付きやすい。**第7室**の入り口付近からは錠前が見つかっており、また昨年報告したように部屋の東端からは金貨も見つかっている。この部屋は貴重品や食料品など、なんらかの物品保管用の倉庫としての役割を持たされていたのかもしれない。ただ、発掘の現況においては、これ以上の推測は無益であろう。

なおこの場所で確認されたモザイクの意匠は、北翼廊のそれとは異なり、交差半八角形、組紐、変形扇形などの文様からなる幾何学模様であった(写真10 a b)。

3 内陣(祭壇部)とその周辺

昨シーズン、その北東隅の一部区画を試掘していた祭壇部は、今シーズン、周辺も含め、全体の調査を行った。床面の傷みが激しく、本号所掲、奈良澤の建築部材報告に示された大理石の断片は、いずれも、どこに嵌まっていたか不明なほど床の各所に割れて散乱していた。とはいえ、随所で下地のモルタルに床材の跡が残っており、それが貴重な情報を与えてくれる。以下、テンプロンの敷石にコの字型に囲まれた範囲を四等分し、北東部を**A区画**、南東部を**B区画**、北西部を**C区画**、南西部を**D区画**と呼ぶ。また、テンプロン敷石から身廊にかけての細長い部分を**E区画**、そして祭壇を覆っていた天蓋(キボリオン)の、現存する東側の二つの礎石と、現存しない西側の二つの礎石のあったであろう場所に囲まれた部分を**F区画**とする(写真11参照)。なお、祭壇それ自体について記述する場合もあって紛らわしいので、この範囲全体を「祭壇部」ではなく「内陣(ベーマ)」と呼ぶこととしよう。

まず、全体を概観すれば、第一に指摘されるべきは、内陣を翼廊から分かつ厚さ七〇cm前後の仕切り壁**9**と**10**が、いずれもテンプロンの南側と北側の敷石(幅五〇cm前後)の上、しかし真上ではなく、それらの幅の半分程度ずつをそれぞれ南北の翼廊側に残し、自らは五〇cm弱ずつ内陣を

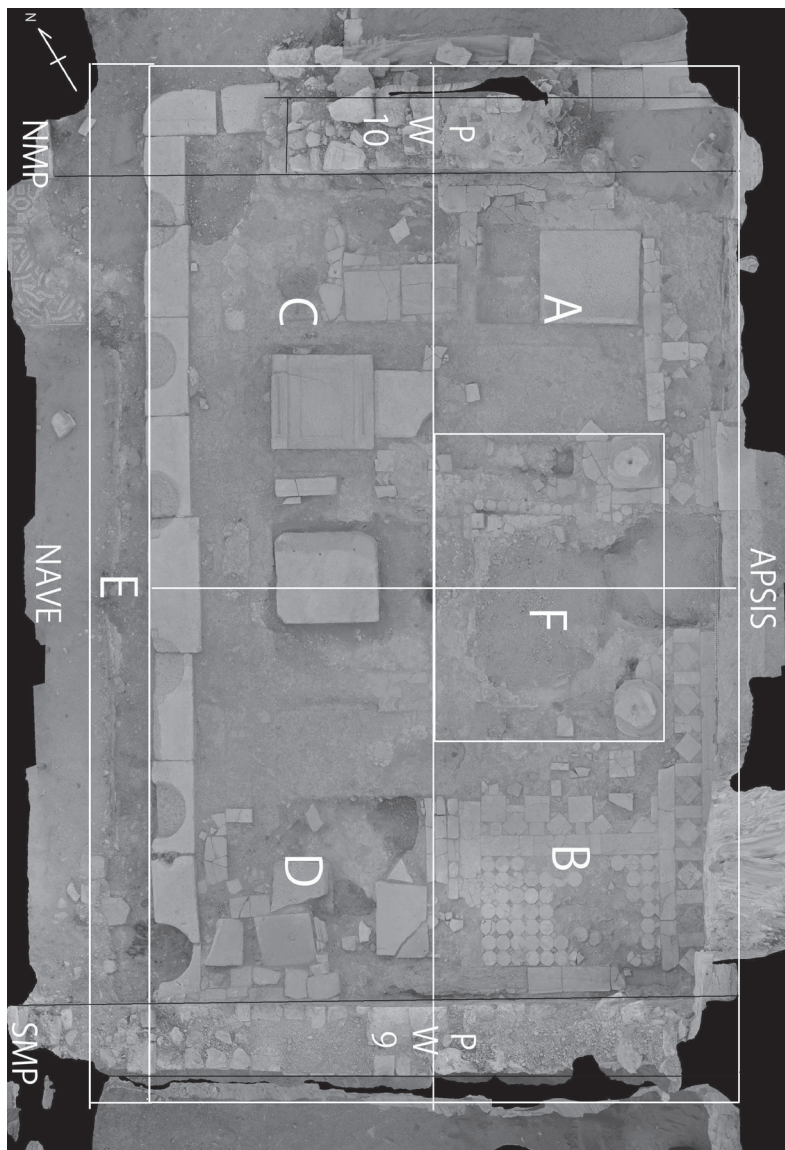


写真 11 内陣とその周辺

狭める形で設置されていたということである。⁵⁾ **仕切り壁9**の内側面は南大黒柱 **SMP** の内側面に切れ目なく連続し、北翼廊への通路を一箇所ないし二箇所持つ **仕切り壁10** のそれも北大黒柱 **NMP** の内側面の延長線上にある (**仕切り壁10**は損壊が著しく、特に東端の壁が存在しないところはもともと戸口であったのか壁が壊されているのか判然としない)。これらの仕切り壁設置の結果、南北約八二〇cm×東西約五七〇cm (西側はテンプロンの敷石の幅を除く) の範囲が新しい内陣として画されることになった。内陣から北翼廊への通路は確保されつつも、聖堂建設当初空間的に一体であった内陣と翼廊部の機能的・視覚的結びつきは弱まり、翼廊を内陣の祭儀空間とは別の用途に転用される可能性を開く一方、内陣と身廊部の空間的一体性を高め、側廊に集う平信徒の視線を内陣に集中させる効果を持ったと考えられる。

一 昨年の報告で、**仕切り壁9**が全体で七つの並立する施工区分をもつことを指摘し、そのことからその壁の漸次的な形成の可能性もありうると書いた。しかし、あらためてオルソ画像として合成された**写真11**を見れば、直線と直角を正しく取って設置されたこの仕切り壁が、一貫したプランの下に設置されていたことは明らかに思われる。従って、今後は漸進的構築の想定は捨て、仕切り壁の設置目的を、

身廊部が機能していた時代、聖堂を貫通型交差廊式から区画型交差廊式に改築するためであったと考えることとした。施工区分はその一部が戸口跡である可能性を残しつつも、大部分は単なる作業工程上の都合によるものであったのだろう。

さて、そのような観点から一昨年と一昨昨年に発掘した身廊と側廊を分かつ柱列柱台の腰高パラペットをあらためて振り返ってみよう。これらは、今や、大黒柱に連なる身廊・側廊間の柱台を連結し、従って大黒柱の身廊側内側面の延長に築かれた**仕切り壁9**と**10**の内側面とも直線をおさすよう設計・施工されていたことが明らかになった。また、**仕切り壁9**のように工法上、使用材料上、ある程度のばらつきはありながら、それらの設計・施工上の正確性・厳密性は総じて、**仕切り壁9・10**のそれらと同じく高度なレベルを達している。少なくとも、翼廊部を細分化しているその他の仕切り壁におけるような、直角の取り付けも厳密を期さない場当たり的な粗放性・粗雑性とは一線を画す一定の建築技術を有していた時代のものと考えべきであろう。一昨昨年、南柱列の第1柱台と聖堂の西の外壁を繋ぐパラペットが、西壁に描かれたフレスコ画(しかも、何度か塗り直されて複数の描画層をなす)を隠す形で取り付けられていた様子から、パラペット自体、聖堂躯体使用の

当初からではなく、後に設置されたものであったと推察していた。仕切り壁との関連性が見えてくると、パラペットの設置は聖堂全体の改築、とりわけ祭儀空間としての身廊・内陣軸の再編成・強調という設計思想の脈絡の中に位置づけられる可能性が高まったといえる。こうした点について一層確かな画像を得るには、パラペットと仕切り壁9・10のモルタルの比較分析などが有効であろう。

ともあれ、今ここでは以下のことを確認しておきたい、(1) 施工技術の高い仕切り壁9と10および柱台間のパラペットは、いつかは判然としないものの、しかし、身廊まで含めて使用されていた時期に、貫通型交差廊式から区画型交差廊式へという聖堂改築の過程で設置された可能性が高いこと、(2) 施工精度の劣る幾つかの仕切り壁による翼廊の小部屋への分割は、区画型交差廊への転換からしかるべき期間の後に行われたらしいこと、(3) 今回の発掘で確認された内陣の床面は、区画型交差廊式への改築以降の様々な改変の跡を反映したものであろうことの三点である。

第二に挙げるべき概観的所見は、内陣内外に人為的に開けられたらしき穴についてである。大規模なものは、写真11に確認できるところ、①祭壇とアプシスの間、②A区画の北東隅、テンプロンの敷石の内側から外側にかけて、③

C区画の北西隅、テンプロンの敷石の外側、④D区画の南西隅と四箇所確認される。④はその上を大きな石板で覆い隠している点で他と異なり、未発掘ながら、そこには人為的に瓦礫が詰め込まれているのが隙間から見て取れる(写真13)。①も未発掘ながら、祭壇の下にまで及ぶ大きな穴には、瓦礫と土が詰まって(ないし、詰められて)いた。

②はテンプロンの敷石の下を通過して北翼廊の下にまで続く一方、③は敷石の内陣側には及ばないものの、西にある北大黒柱にまで達している。ただし、③の内陣側は象嵌モザイクの床面舗装と下地のモルタルが剥がされて版築土層が現れており、穴を開ける予定であったものが途中で何らかの理由で断念されたものと考えられる。②には、瓦礫や土に混ざって、小ぶりの柱礎(L4)が落ち込んでいる(写真14)一方、③には、同じく瓦礫・土に混ざって、イコノスタシスの柱と同程度の太さの柱の一部(L2)が横たわっていた(写真15)。いずれも、発掘を継続すると大きな崩落を招きかねないことから、これらの部材を引き上げることはあきらめ、従ってその底を確認するには至らなかった。これらの穴がいつ、どのような経緯で開けられ、また、埋まった、ないし埋められたのかについては、発掘できていない現在のところ、容易に推察しがたい。しかし、少なくとも、②と③の二箇所、ちやうど身廊から北翼廊の境目



写真 12 南翼廊側のテンブロン
の敷石

に接する場所が掘削されていたことは、内陣と北翼廊の一体的再編成のための土木工事があったことを示唆するかもしれない。二〇一一年の発掘で、北翼廊第2室には、北側廊からの通行を遮断する粗末な仕切り壁1が設置されていたことが確認されている。また、同じ発掘で、第2室の東寄り、天板に平たい石灰岩の転用材を戴いた祭壇状の構造物(祭壇E)が出土しており、この構造物は北翼廊の最終的崩落時まで残っていた(写真16)。そのほかにも、仕切り壁10の北側に幅六〇〜七〇cmの踏み段状の構造物が取り付けられるなど、聖堂使用の最終段階における北翼廊第2室の空間への人為的介入は、圧倒的とは言えないながら、他と比べて顕著である。ここでは、石材以外に目立つ



写真 13 ④区画の蓋石と瓦礫

た遺物の発見はなかったから、放棄時、ないし崩落時に実用の空間として機能していたかはいささか疑問だが、後述するような、内陣における祭壇の不在、その反面での北翼廊第2室における祭壇の存在、内陣との境界での土木工事の痕跡は、南北の軸を導線とし、北翼廊第2室を焦点とした聖堂機能の再編成があった、ないし行われようとしていたことを予想させる。一昨年の報告で、南側廊に開けられた外部戸口が、昨年の報告で南翼廊第4室が、いづれも聖堂使用の最終段階で機能していたことを指摘し、身



写真 14 ②区画の瓦礫と柱礎 L4



写真 15 ③区画の瓦礫と柱 L3

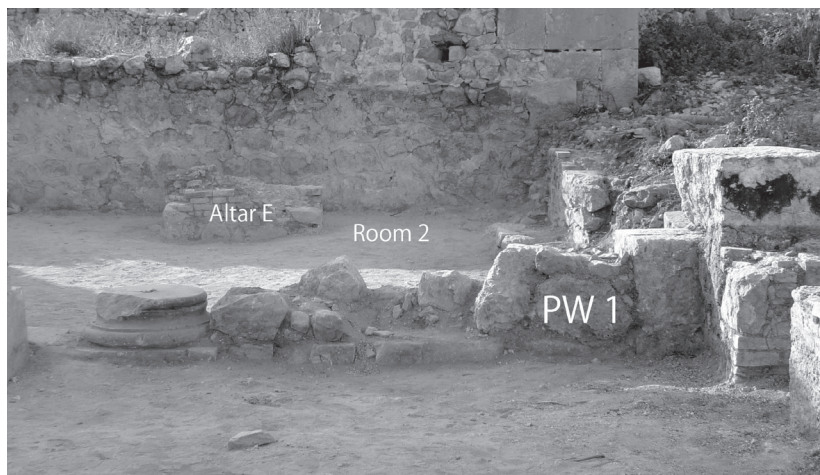


写真 16 北翼廊第 2 室と祭壇 E (西→東) 2011 年撮影



写真 17 A 区画 (北→南)

廊の西のメインエントランスが機能しなくなつてからは南北の導線が重要になつたものと推測していたが、今回の知見は、そうした推測とも関連づけうる可能性を秘めている。以下、区画毎に所見を記す。

A区画（F区画との重複部分を除く）昨年、その北東隅の一部を試掘していた**A区画**は、**北翼廊**との境に②の穴を持つていることが明らかになつたが、この穴が、アプシス脇の外壁までつづいていた**仕切り壁10**を崩して掘つたものか、あるいはこの箇所**に北翼廊への通路**、ないし戸口があり、その敷居の下を掘つたものかは分からなかつた。穴の断面に観察されたモルタルの層位については、**F区画**におけるそれとの関連で後述する。

この区画でまず特筆すべきは、唯一残っている南北に伸びる象嵌タイル列で明瞭に観察できるように、象嵌タイルが赤モルタル（RM）の下地によつて支えられていたという事実である。これはこの区画に限つたことではなくいたるところで観察され、その上に、昨年テデスキが報告している⁵ごとく、白モルタル（WM1）で施された補修の跡がところどころ残されている。とくに注目されるべきは、象嵌タイルに限らず、たとえば、中央北寄り、説教壇等手すりの転用材と思われる約1m四方の大きな分厚い石板など

も赤モルタルによつて固定されているという事実であろう（写真17）。このことは、赤モルタルを使用してその上に既存の象嵌タイルでパターンを描いた時点ですでに、タイルは床面全体を覆い尽くすには不足しており、転用補修材で床面のかなりの隙間を埋めなければならなかつたという事情を推察させる。上述の南北に伸びる象嵌タイル列の軸線は、アプシス部と内陣の境目を画す踏み段の縁に対し、若干反時計回りにずれている。タイルの寸法が揃い、端から埋めていくのに十分な数が揃つていればそのようなことはあり得なかつたであろう。なお、写真17に見えるとおり、分厚い転用材の石板の西側の赤モルタル上には六〇cm×五〇cmの大型タイル二枚分に相当する大きな嵌め跡が残されている一方、タイルは見つからなかつたから、内陣が放棄された際には、そのような転用補修材すら、少なからず取り外されていたことを示している。ちようどこの場所から未使用の封緘が発見されているが、大型タイルが床に嵌まつていた時代のものとは考えがたく、それが司教のものにせよ、世俗の役人のものにせよ、時代的には聖堂の終末期近く、かなり下るものであると考えるのが妥当であろう。

B区画（F区画との重複部分を除く）

この区画は、象嵌モザイクのタイルをよく残し、その描

くパターンについて最も多くの情報を与えてくれるが、その点についての検討結果はデダスキの次号報告に譲る。

建築の観点からは、**仕切り壁9**ぎわ、**10cm**ほどのマージンを残し東西に走っている長方形の象嵌タイル列が注目値する。**40cm**という、内陣で使われているこの種のものとしては異例に幅の広いタイルの縦列は、象嵌モザイクのパターンに外周の縁取りを与えるものとして敷かれていた可能性が高い。確かに、この縁取りの南には、**仕切り壁9**の下テンプロンの敷石まで幅**60cm**ほどのスペースが残されている。しかし、このような幅広の枠の外に**60cm**程度で縁取りパターンを描くことはデザイン上のバランスを失することになるだろう。象嵌モザイクのパターンのみから結論づけるのは危険だが、もしこうした推定が当たっていれば、この区画でよく残されている正方形、長方形、直角二等辺三角形の石板による東端の縁取りのパターンや、その内側の八角形と正方形の石板によるグリッドパターンは、いつのことか不明ながら、少なくとも**仕切り壁9**が設置された後、狭められた内陣の床を飾るものとして敷き直されたということになる。

こうした推定を裏付けるには、**仕切り壁9**と、タイル等床材を固定しているモルタルの關係が明らかにされる必要があるだろう。ところが、残念ながら**仕切り壁9**と床の継

ぎ目の東半分は壁面のモルタルから続く白いモルタル、ないし漆喰(WM1)で補修されていて赤モルタルがどこから始まっているか確認できない一方、西半分は、溝が掘られており(写真18)、煉瓦などの下地層の上に築かれた仕切り壁と赤モルタルの關係については、確実な知見を得られなかった。仕切り壁と赤モルタルの關係はつきり見て取れるのは、下記に触れるC区画においてである。

なお、白モルタルWM1は、C区画においても確認できることだが、ところどころ、欠けてしまった象嵌タイルを補うために、それぞれのパターンにふさわしい形で造形されて用いられている(写真19)。また、この白モルタルWM1は一昨年、初めて仕切り壁9が掘り出された際、床から連続して立ち上がって壁一面を覆い、その下にある彩色フレスコを隠している様が観察されていた(写真20a)。今、このモルタルは風雨によって、床からの立ち上がり部分とアプシス側の壁を除いて消え去ってしまったが(写真20b)、こうした事実は、白モルタル(WM1)を用いて象嵌モザイク床面と仕切り壁の装飾を補修した段階が、仕切り壁にフレスコを描いた段階や、赤モルタル(RM)を使ってタイルを貼り直した内陣再編成の段階から、しかるべき時間の隔たりを持っているということを示しているであろう。

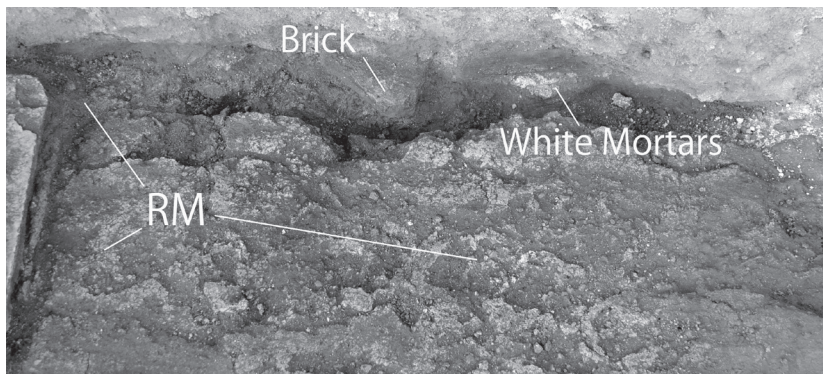


写真 18 仕切り壁と床の接合面（B 区画西）



写真 19 WM1 によるパターンの造形写真

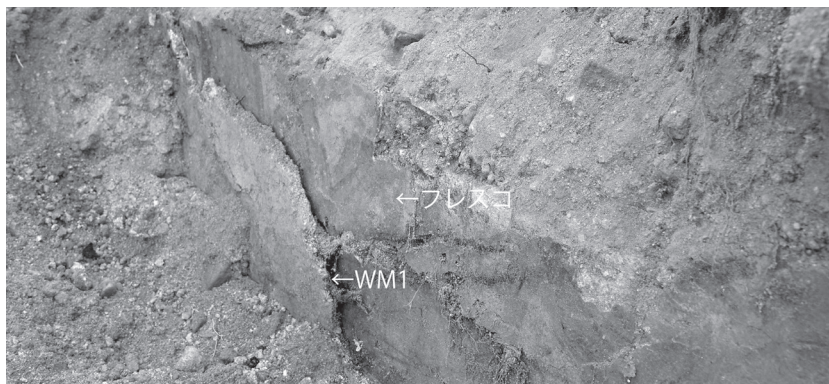
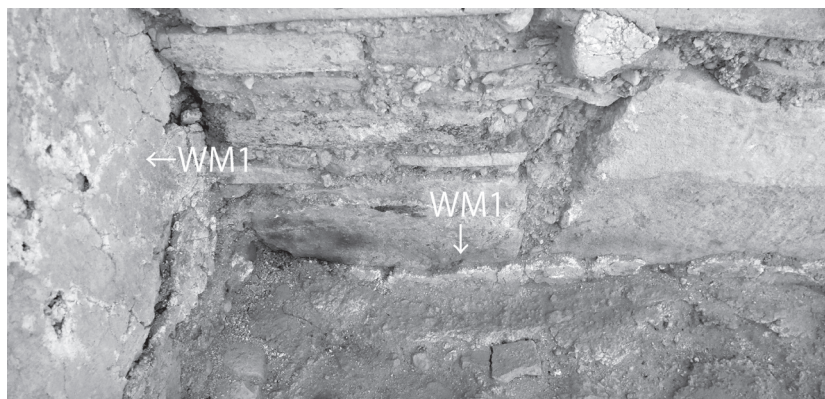


写真 20a 仕切り壁9の彩色フレスコとその上のWM1



20b アプシス脇壁面・仕切り壁9・床の接合部と WM1

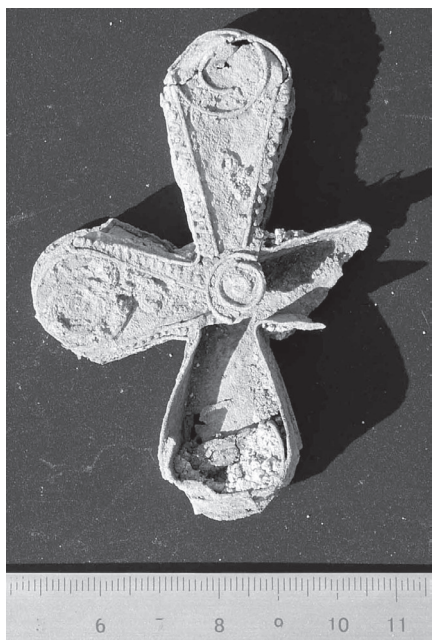


写真 21a,b,c 聖遺物入れ写真



写真 22a,b ろうそく立ての吊り金具

仕切り壁9と床面の継ぎ目に掘られた溝の内外からはガラス片が少なからず発見され、中には器形がある程度分かるものもあった。仕切り壁9の近く、D区画との境目あたりからは宝石や貴石を嵌めこんだ跡の見られる、入念に細工を施された小型の青銅製十字架型聖遺物入れが見つまっている(写真21a、c)。また、東のアプシス脇の壁付近からは吊り下げ式の青銅製ろうそく立ての吊り金具が発見された(写真22a、b)。

C区画 この区画は、A区画やD区画同様、床面の毀損は激しいものの、建築構造上他、幾つか興味深い知見を提供してくれる。

まず、仕切り壁10の西端、テンプロンの敷石が露わになっている周辺では、上述のごとく床面と赤モルタル、そしてその直下に敷かれた第二の白モルタルWM2層が剥がされ、版築土層がむき出しになっていたが、壁の西端面に沿って一〇cmほどの幅で赤モルタルが敷石にいたるまで残っているのが観察された(写真23)。

仕切り壁10の西端上部が直線になるように築造されていることも併せて考えると、もともとこの部分には内

陣から北翼廊へ通じる通路、ないし戸口が設けられており、そこには内陣の床から続いて壁と敷石の際まで赤モルタルが敷かれていたものと見られる。仕切り壁10の南面に対する床の接合を見ると、おそらく仕切り壁9に見られた象嵌モザイクのパターンが始まるまでの10cm程度のマージンにあたる部分に細長い石の列が嵌めこまれており、おそらく赤モルタルとその上の象嵌タイル他の床材は、この列石に突き当たるところで、これらの列石も支える形で敷設されていたと考えられる。すなわち、上の仕切り壁9について記述した際に推測したごとく、赤モルタル、およびその上に載せられた現存の象嵌モザイク等の床面は、仕切り壁設置の後に、狭められた内陣の床を飾るために貼られたものという可能性が高い。

赤モルタル直下には、WM1とは異なる白いモルタルWM2層が確認されたが、この層は、内陣にできた各所の穴の掘削断面を見ると、すべての場所で確かめられる。その下は、場所によっては瓦礫が敷かれている場合があるが、この箇所その他C・D区画各所では、摩耗した土器や細かく砕かれた獣骨を含む版築土層が確認された。村田報告にある⑤の小さな銅貨は、この場所の版築土層の比較的浅い層から現れている。それが古代末期のものにせよ、それよりさかのぼる時代のものにせよ、この層は、いずこか、

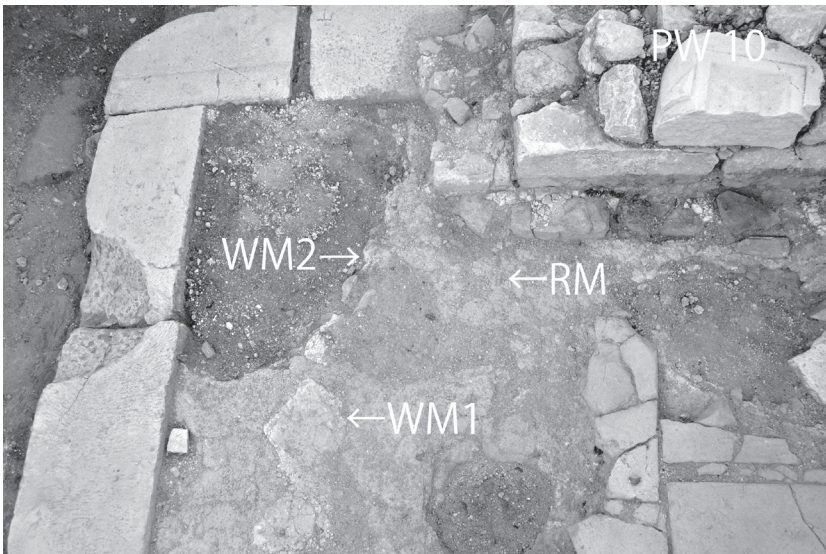


写真 23 仕切り壁10の西端（南→北。床上のモルタルはRM）

ゴミを含む場所からもたらされた土を用いて形成されたものと思われる。

なお、写真23の中央右寄り下部に見える円形の穴は直径50cmほどの比較的浅い、しかし版築層まで掘り込んだすり鉢状のそれであったが、中から、二等辺三角形の黒いスレート製象嵌タイルが三枚現れた。これはC区画の右上、東西の軸線に沿い、白い二等辺三角形のタイルと組み合わせて直線パターンを描くのに使われていたタイルと同じものであり、そうしたタイルがまとまって自然にこの穴の中に落ち込んだとは考えがたい。内陣の床面を再編成した際、人為的に埋めたものであったろう。なお、これら白と黒の二等辺三角形の象嵌タイルを用いて描いたパターンは、同じC区画の南東隅に残っていたが、興味深いことに、周辺のタイルを含め、白モルタルWM1で覆い隠されていた形跡が認められた(写真24)。せっかく残されている象嵌モザイクをわざわざ隠すというのは奇妙であるけれども、WM1で床面の補修を行った聖堂使用の最終局面で、ごく一部しか残っていないこのパターンが全体の装飾計画にそぐわないとみなされたか、このパターンがそもそも時代の感覚に合わず忌避されたか、あるいは床面の平滑を確保するため低くなった箇所を白モルタルで覆い隠したのか、ならんらかの理由によっていたのであろう。この位置は、祭壇



写真 24 象嵌タイルとその上に載せられた WM1

の天蓋の柱礎があってもよい位置であり(後述)、もしかすると最終段階の内陣の再編成の際、この場所に再度柱礎を置く計画で、モルタルが被せられたものが、そのまま

完成前に放棄されたのかもしれない。ともあれ、赤モルタルで象嵌タイル等を床に嵌めこんだ時代と、白モルタル WM1 で床面を補修した段階に時代的隔たりがあるだろうという上の推測は、こうした事例からも裏付けられるように思われる。

最後に、この区画の中央やや南寄りには、**A区画**におけるのと同様、説教壇、ないしテンプロンかソレアの手すり石板の転用材が、表を上にして敷かれているのが見いだされた。サイズ上**A区画**の転用石材とほぼ等しいこの石板は、水をかけてみると、中央の菱形に囲まれた十字架の浮彫りが削り落とされていく痕跡を顕わした(写真25)。削られたのはこの石板を床材に転用する際、十字架が土足で踏みつけられるのをはばかってのことであろう。十字架が付いた面をわざわざ上に向けているからには、裏面には、削り落とすのにより手間のかかる意匠の浮彫りが施されている可能性があるが、**A区画**の石板と同様、モルタルを壊すのを恐れ、確認を見送ったので確かなことは不明とせねばならない。

D区画 この区画は④の穴の発掘を見送ったので、得られた知見が最も少なかった。

写真11で、この区画の中心線から南寄りに帯状に白いモルタル層が見えるがこれは赤モルタルの直下に敷かれた**WM2**層である。その両脇には、版築土層までこのモルタル層**WM2**を剥がした形跡が認められた。

なお、**C・D区画**の、テンプロンの敷石に1m内外の間隔で刻み込まれた半円形のくぼみについては、目的も用途

も、相変わらず分かっていない。一昨年の報告では、これらの、深さも形状もまちまちなくぼみに円柱を置いたと考えることは難しいと書いたが、後述するようにテンプロンの敷石の西側には三〇〜五〇cm程度の幅の溝が掘られており、ここに瓦礫等で準備層を形成し、その上に柱礎を置いて水平を取れば、柱が立たないこともない。とはいえ柱礎は見つかっていないので、一昨年、オープンなままにしておいた問題は、未解決のままである。

E区画 上述のごとく、幅三〇〜五〇cm、身廊のモザイク舗床面(これは内陣の床面とほぼ同じレヴェルであった)から深さ二〇cm弱の溝がテンプロンの敷石の西側、すなわち身廊側に掘られていた。溝の大部分では、黄白色のモルタルに行き当たったところでそれ以上深く掘り下げられていないが、北端と南端では、このモルタル層を突き崩して深い穴が掘られている。北端に掘られたのは北大黒柱の東側一帯に開けられた③の穴で、これは北翼廊にまで続く広範なものである。それに対し、南端の穴は、テンプロンの敷石に開けられたくぼみが敷石を貫通して半円形に掘られているのに続けて掘られた穴であり、範囲はごく狭い(写真25)。いずれも底は未確認である。溝の身廊側の掘削面からは、身廊側のテッセラモザイク舗床をわざわざ壊して



写真 25 C区画の石板

溝を掘ったものであることが分かる。D区画北西端あたりの西側の掘削面では、とりわけその様子がよく観察されるが、白のモルタルで作られたモザイクの下の下のさらに下には、細かく砕かれた赤煉瓦の中間下地層(メデイウム)が存在していた(写真26)。その下は、上述の黄白モルタル層なので、少なくともこの箇所では、テデスキの昨年度の報告にあるような、碎石によって形作られた北翼廊の舗床モザイクの三層構造とは違う下地の作り方がなされていたものと見られる。その詳細は、今年度のテデスキの床面の発掘成果に関する報告に譲るが、下地の作り方の相違は、おそらく、それ以前の床面構造の条件の違いによるもので、同じレヴェルにあり、類似するテクニクを用いて作られた翼廊のモザイク床面と身廊のモザイク床面は、同じ時代、同じフェーズに属するものと考えてよいものと思われる。また、ここでテッセラモザイクを支えている白モルタルが、内陣のWM2と同じものとなら、赤モルタルを支えられた現存の象嵌モザイクに先立つ初期の内陣の象嵌モザイクは、白モルタルWM2の上に直接載せられていたものと考えるのが自然であろう。

③の穴については、層位に注目しながら北大黒柱の基礎のあたりを発掘したところ、身廊のモザイク面から二〇cm

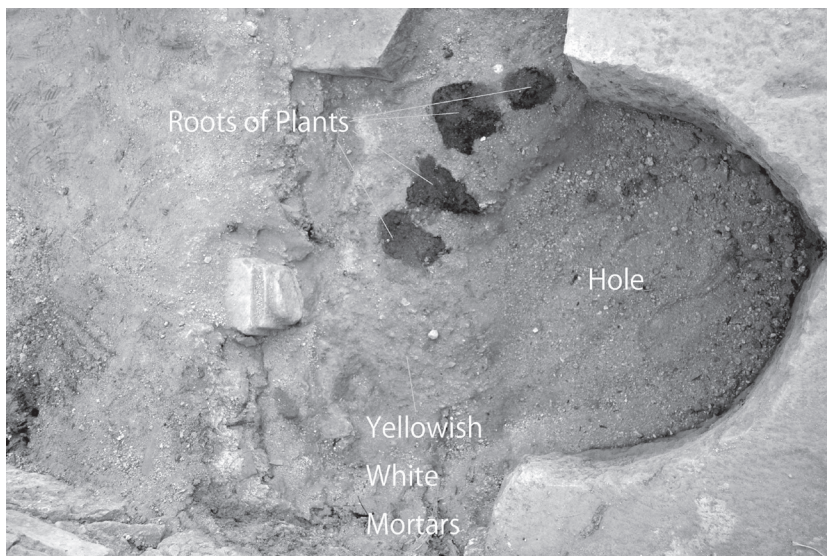


写真 26 E 区画南端の穴



写真 27 身廊のモザイク床の断面



写真 28 北大黒柱の基礎と黄白モルタル層
(左手では手前に垂れ下がっている)

弱の深さにある黄白モルタルの層が、ちょうど北大黒柱の一番下のブロックの下部に突き当たっているのが確認された(写真27)。その上には瓦礫で作られた準備層があり、その上にある白モルタルの下地を支えている(上述の赤煉瓦の下地は、この箇所では不明瞭、もしくは不在であった)。黄白色のモルタルは、現存する身廊のモザイクや翼廊のモザイク床面が形作られた時代以前の床面のレヴエルを示している可能性が高い。さもなくば、わざわざモルタルで下地を作り、その上に瓦礫等の中間下地を作る意味が不明となるからである。白モルタルに支えられた現在のモザイク舗床面は、そのデザインや技法から、古代末期のものと考えられるが、黄白モルタルに支えられた床面の段階があったことを想定するならば、聖堂の歴史は、地震などにより古代末期の内にも再建を経験していることになる。これはクサントスの東聖堂がやはり現存する古代末期のモザイク舗床面の下に初期の聖堂の舗床面を持っているのと並行する事例となろう。後述する内陣の黄白モルタルと、層位もほぼ同じなので、内陣の黄白モルタルも、同じく初期の聖堂の床面の下地と考えたいところであるが、いずれにせよ、それらの床面の舗床を確認するには至っていないので、さしあたり今後検証する必要がある仮説というにとどめておきたい。



写真真 29 大理石の石

F 区画 祭壇の天蓋（キボリオン）の柱の礎石がある場所
 および、あったと思われる場所に囲まれたこの部分は、本来、祭壇が置かれた、内陣でも最も重要な空間であった。しかし、祭壇は、残っているとどこでもわずかに煉瓦二段分程度の高さしかその痕跡をとどめず、またアプシス部か

ら続く大きな穴①が掘られているので、むしろその痕跡はほとんど残されていないと言っても過言ではない。

東側（身廊から見て奥）の二つしか残っていない天蓋の柱の礎石（CB1.2）は、聖堂および内陣の中心軸に対して左右対称の位置関係にある。写真11でF区画の西端を画するために引いた線は、ちょうどアプシス脇の壁から、テンプロンの敷石の西端までを含んだ範囲を二分する線であるが、この線上に幅4cmほどの、タイルというにはかなり厚みのある大理石の列が敷かれ、途中まで現存している（写真29、34）。欠損している西側の二つの柱礎があるべき場所は、もし天蓋が正方形の区画を覆うものであったのなら、東側の二つの柱礎が現位置を示すものと仮定してちょうどこの列石の西側、写真24の象嵌タイルに被さるWM1が広く敷かれたあたり（北西の礎石の位置）と、赤モルタルが床材の跡を残しているあたり（南西の礎石の位置）になるだろう（写真34は仮にその範囲を天蓋の範囲として切り取っているのでそれぞれその写真の左下隅と右下隅がその場所にあたる）。その場合、列石はかつての天蓋の柱礎の内のりを結んだ正方形の範囲を画するものと考えられるが、他の三辺には同様の列石は残されておらず、残念ながら確かなことは言えない。

少なくとも言えることは、赤モルタルで内陣床面が再編

成された際には、すでに柱は東側の二本しか立っておらず、西側の二本は失われていただろうというのである。南東の柱礎(CB2)周辺では、柱礎脇の北と西のモルタルが浸食により流されてしまっており、幸いその空隙から、柱礎の下の構造が見て取れる。観察の結果、柱礎自体、石や瓦礫で作った下地層の上に載せられたWM2と思われる白モルタルの上に設置されて、灰色モルタルGMで固定されており(写真30)、おそらく、WM2が床面の舗床材を支えていた時点の状態で現存していると推測されるにいたった。すなわち、以上の知見を総合すると、赤モルタルを用いて内陣床面を再編成した時点では、天蓋の再建は考慮されず、その東側の二つの柱礎が、飾り柱を立てるために残されたことになる。

写真34に見えるように、二つの柱礎の上面がおそらく人為的に角を落とされ、狭くされているのは、柱礎の上面の面積に対して底面積の小さい柱を立てるためであったからと考えられる。南東の柱礎CB2の西側面も人為的に削り落とされているが、これについては、いつの時代かに、直方体の大きな構造物をこの面に取り付けるためであったであろうと推測しうるのみである。一昨年の発掘時には飾り柱はこの場所からは見つからず、仕切り壁9と10の脇に、底面の径四〇cm程度のものがそれぞれ一本ずつ(78a,bと

123)横たわっていたので、最終使用時には、飾り柱自体、アプシス脇の壁近くに移されていたか、あるいは、現在柱礎がある位置に置かれていたものの、倒壊などがあって、その後再建のため、仕切り壁脇に寄せられていたかのいずれかと思われる。

北東の柱礎の西側に一直線に長さ一m強、幅四〇cmほどの帯状の比較的深い掘削跡、ないし床材の痕跡が観察されたが、そのうち最東端では矩形に、二〇cm以上の深さにある黄白モルタルの層まで掘られていた。ここでは赤モルタルRM、その直下の白モルタルWM2、瓦礫層、黄白モルタルYHMの四層構造が明瞭に観察された(写真31)。祭壇とアプシスの間の穴①では、穴の北側と南側で断面を調査することができ、ここでも、やはり同様の四層構造が見て取れた(写真32 a、b)。要するに、F区画では、身廊寄りのC・D区画と違って白モルタルWM2の下に版築土層を持たず、代わりに瓦礫を固めた層を持っていたということになる。

他方、C・D区画では、少なくとも床面より三〇cm下を掘ることができた箇所でも、版築土層の下に黄白モルタル層は確認できなかった。A区画の②の穴でも、内陣側を床面から三〇cmの深さまで掘り、その断面を清掃してみたけれども、WM2の下は版築土層で、その下に黄白モルタル

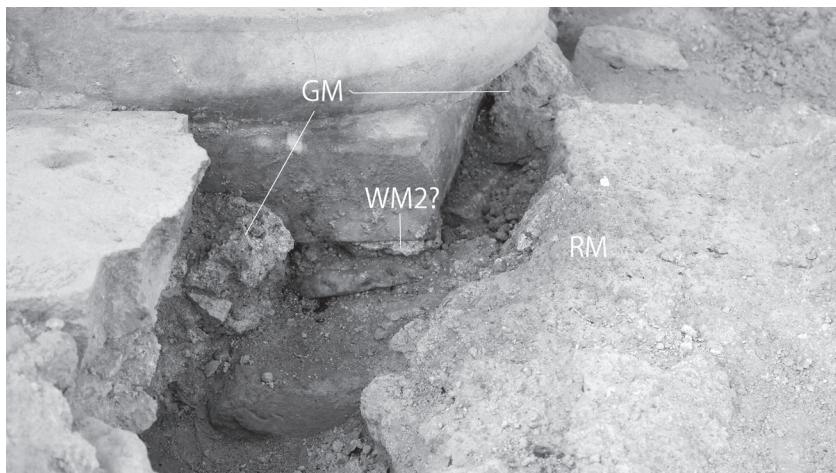


写真 30 柱礎脇の灰モルタルと、柱礎下の赤モルタル

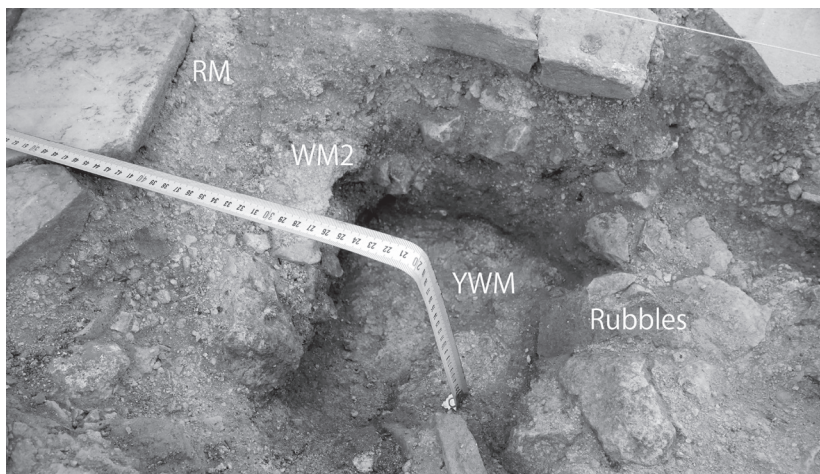


写真 31 祭壇北脇の溝

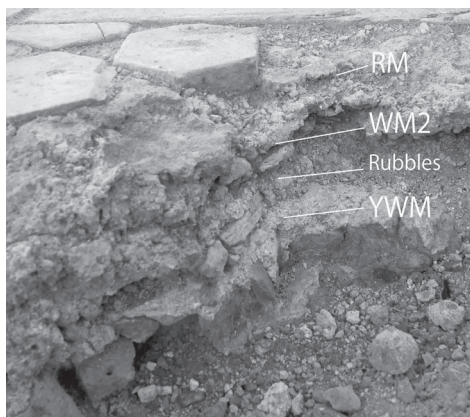
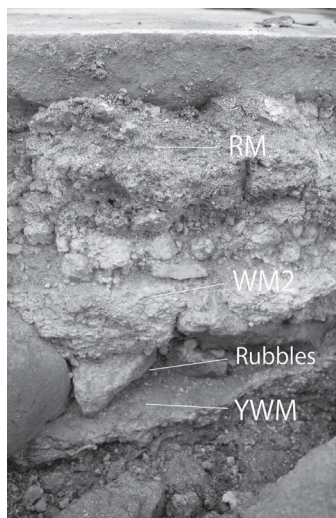


写真 32a ①の穴の北側断面 写真



32b ①の穴の南側断面

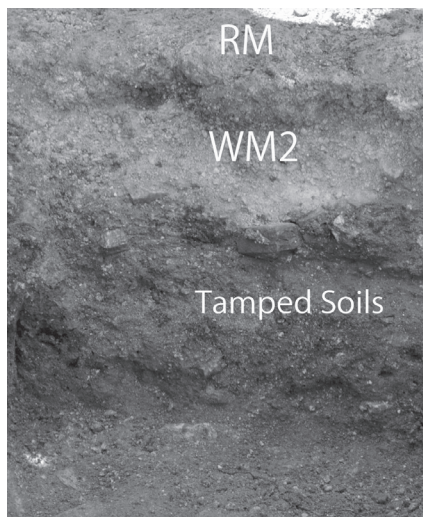


写真 33 ②の穴の南側断面

の層は存在しないようにみえる(写真33)。もちろん、以上の限られた観察から、結論めいたことを述べることはできないし、今後とも調査を継続する必要があるけれども、同じ内陣でも祭壇周辺と、テンプロンの敷石周辺で、床面の基礎の作り方が異なっていた可能性があることを指摘しておきたい。

最後に、祭壇についての所見を記す。赤モルタルを用いて内陣を再編成した時期、祭壇は、六角形の白大理石／石灰岩のタイルと正三角形の黒いスレートタイルを組み合わ



写真 34 六角タイルで区画された祭壇の範囲

せて縁取りパターンを描いた範囲の中に据えられていたと考えられる。このパターンのタイル列は祭壇北側に六角形タイル九枚からなる一列と、そこから斜に折れ曲がって西側に六角形タイル三枚からなる一列が残っているのみであるが、南西角には、その延長上に、かつて敷かれていた六角形タイルの嵌め跡が赤モルタルの上に確認できる。また、その嵌め跡から内陣の中心軸と平行にまっすぐ内陣奥へ一

m強進んだ場所には、いかにも建築部材がはまっていたかのように見える嵌め跡が赤モルタル上に残っている。これらの角を、北側タイル列の東端の六角形タイル脇に残された部材の嵌め跡と結んでみると、南西の角のみ直角の、全体として南西方向に押しつぶしたような四角形の範囲が描かれる(写真34)。そもそも、北側に残っているタイル列自体、中心軸に対して時計回りに二度ほどずれているのに対し、西面が、ちょうど内陣の中心線に直交しているの
で、四点を結ぶと、いびつな非対称の四角形にならざるをえない。一つ指摘しておくべき重要な点は、この西面が、いびつな四角形の一边であるにもかかわらず、身廊から眺めたとき、ちょうど内陣の中央に正面し、背景の飾り柱に挟まれた空間のほぼ正確に中央に来るように配置されているということである。問題は、現存する祭壇の名残のわずかな煉瓦積みと、赤モルタル上の六角形のタイル列に囲われた範囲との間のクロノロジカルな関係であろう。実のところ、祭壇の名残の煉瓦積みは、ベージュのモルタル **RM** で成形されていて、赤モルタル **RM** に支えられたタイル列とは明らかに異なる造作によっている。両者の間にできている、西端では3cmもの隙間を作っているくさび形の溝を清掃してみると、タイル列の下のモルタル層はほぼ垂直に形成されており、祭壇の名残との間の隙間はくさび形の

まま、一〇cm近く下の平滑な水平面に行き当たるまで続いている(写真35)。残念ながら、この隙間の底の平面の素材がモルタルであるのか石板であるのか等、確認できていないので、不明な点は残しつつも、こうした事実は、現存する祭壇の基部とタイル列が違う時代のものであった可能性を強く示唆する。すなわち、隙間は後代の地殻の変動などによるものではなく、現存祭壇の基部を据えた際にすでにできてしまったものと考えられるからである。タイル列とその下のモルタルを、わざわざ祭壇の側面に対して



写真 35 祭壇北の溝

くさび形に隙間を作るよう造作することは考えがたく、もともと、いびつな四角形のモルタル作りの凹みが先に存在し、そこにはまっていたかつての祭壇を取り除いた後、整形の煉瓦とベージュのモルタルを使って新しい祭壇を作り直したため、このような隙間が生じたものであろう。

筆者は、赤モルタルを使って六角タイルの枠が作られた時代の祭壇は、腰高の石板パネルを口の字型に嵌めこむことで形成されていた可能性が高いと考える。すなわち、東西南北、四枚のパネルの幅がわずかず異なるため、

あるいはむしろそのようなサイズの異なるパネルしか手に入らなかったため、上述のような不整形四角形の凹みを作らざるを得なかったと見るのである。この凹みの西面が内陣の中央、身廊に正面する形で作られていたと述べたが、その幅は一五六cm、それに対し、北面の幅は一〇七cmであった。ここには、祭壇の重要性・中心性をよく示す入念なレリーフを施された石板が据えられていたのであろう。その

ような想定のもと、これまで発見された遺物を点検してみれば、一昨年度、断片となつて発見された、片面に古代末期、もう片面にビザンツ中期の、いずれも丁寧なレリーフが刻まれた大理石製の二枚のパネル断片は、祭壇の側面を飾るにふさわしい石板と言へる。田中の復元によれば、これらの石板(二〇一二年田中報告の⑤と⑥)は、もともと古代末期にレリーフが刻まれた段階では、厚さ六cm、幅一三〇cm、高さ一〇〇cmほどのサイズの、大円に囲まれた十字架文と鷲文からなる同じ文様を持つものであったが、いずれも、裏面にビザンツ中期の鳥獣文、草木文、幾何学文、組紐文のレリーフが刻まれた段階では幅一〇〇cmほどにカットされたと思われる。見つかった場所は身廊の南寄り、内陣に近いところであつたので、おそらく地震等による破損ののち、元の位置から取り外され、南内戸戸口2の前あたりの作業スペースに置かれていたのであろう。そのほかの側板、とりわけ西面を飾った最も重要なそれと推測される部材は見つかっていないが、これまでに、ビザンツ中期風の文様が刻まれたパネル断片(写真36 a、b)がいくつか出土している。

なお、聖堂使用の最終段階における祭壇については、上述の煉瓦積みの名残以外は、確認できていない。遺跡全体

史苑(第七五卷第二号)



写真 36a, b レリーフ付きパネル

の発掘責任者タネル・コルクート氏が、祭壇中央部のモルタル層の確認しか許可されなかったからその確認の機会を得られなかったという事情もあるが、わずかに発掘することのできた中央部(写真37)でも、祭壇の基壇部分の遺構は現れなかったので、おそらく地震などの天災後の再建の試みの中、あるいは①の穴が開けられた際、取り去られてしまったのであろう。少なくとも、聖堂の最終的な放棄の時期には、この場所は祭壇として機能していなかったと考えるのが妥当である。

4 身廊北東隅の床 今シーズン、身廊北東隅、③の穴の西側の床面を開けた。詳細はテデスキ報告に譲り、二点のみ、特記しておく。この場所は、二〇一一年の発掘でたき火などによる炭化した土に混ざって中期ビザンツの彩釉陶器が出土した北内部戸口2の脇に当たるが、北大黒柱の南にやはり炭化した土層が現れた(写真38)。土の中からは、彩釉陶器の細片が幾つか出土している。また、内部戸口から入ったところに九七cm×一一〇cmの石板が裏を表に敷かれていたが、これを表にかえすと、奈良澤報告に詳述されているような凶案のレリーフが見いだされた。これも、説教壇やソレア、ないしテンプロンの腰高手すりパネルの一つであったであろう。写真11では、内陣のC区画とD区画

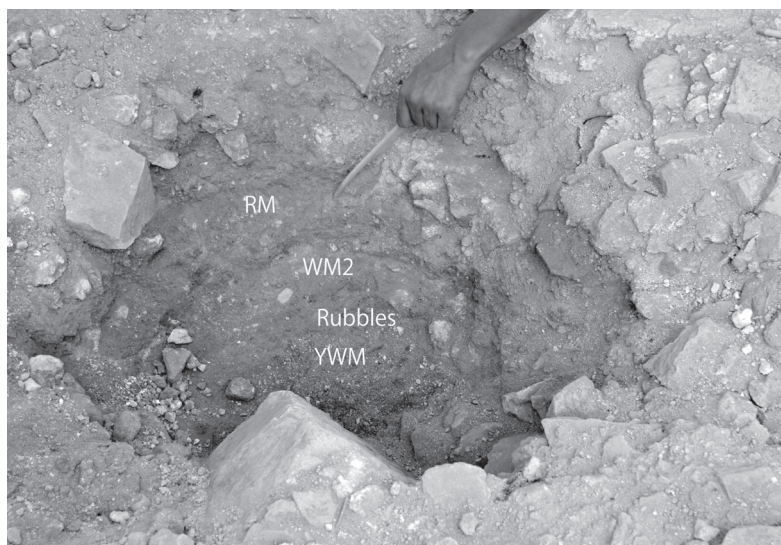


写真 37 祭壇中央のモルタル



写真 38 北大黒柱南の炭化土層（写真の右端はパネル）

の間の、もともと同様のパネルがはまっていたと思われる場所に裏返して置いた。

註

(1) 二〇一四年の参加メンバーは、科学研究費基盤(B)「古代・中世地中海世界における宗教空間と社会変動」トロスコ遺跡聖堂遺構の発掘調査」メンバーから、浦野の他、深津行徳、草生久嗣、師尾晶子が、同科研協力者から村田光司(貨幣担当)、高橋翔(石材・図面担当)、高橋咲、松崎哲也(動物骨担当)、青山竜済、安平明穂、松丸夏希、クラウディア・テデスキ(モザイク調査・保存担当)、アレックスサンドラ・コスタが、師尾氏の科学研究費基盤(C)「リキアにおける都市アイデンティティの形成と展開」碑文習慣の展開からの考察」の協力者から向井朋生(土器・ガラス器担当)、奈良澤由美(石材担当)が参加した。広島大学の奥山広規氏には、ゲストとしてお越しいただき、とりわけ製図ソフト使用に際してご助言をいただくなどお世話になった。記して謝しておきたい。なお、二〇一三年について、前号で記載を怠ったので、あらためて参加者を記しておく。浦野の他、太記祐一、深津行徳、師尾晶子、小笠原弘幸が「聖堂遺構発掘調査」科研メンバーとして、川本智史、高橋翔、山本悠貴、山根友樹、クラウディア・テデスキ、アレックスサンドラ・コスタが協力者として参加した。

(2) 時代が下り一五世紀のテッサロニケのシメオンによれば、教会は聖性の高い順にベーマ、ナオス、ナルテックスの三つに区分されるとい(Symeon of Thessalonike, 90)。テンプロンの障柵に囲われた範囲がベーマであった。この範囲は通例我が国では「内陣」と訳されている。また、太記祐一『ビザンツ帝国マケドニア朝時代の教会建築における皇帝の儀礼に関する研究』(東京大学提出博士論文)、

一九九七年、一六頁以下も参照。

(3) オルソ画像として合成された写真11から、北翼廊と内陣、テンプロンの敷石と仕切り壁10の關係は明白であるが、南翼廊と内陣、テンプロンの敷石と仕切り壁9の關係は、南翼廊側、仕切り壁9の直下に三〇cm×四〇cmほどの試掘により確かめた(写真12)。

(4) この写真撮影時、天板はすでに取り外してあり、また、一二年冬、煉瓦積みみの部分のみをトルコ隊が復元している。

(5) クラウディア・テデスキ(米倉立子訳)『史苑』七四―一、二〇一四。

(6) ある箇所では、壁の下に赤モルタルが入り込んでいる一方、別の箇所では、壁の直下に白モルタルに支えられた煉瓦が観察された。

(7) M. P. Raynaud, *Corpus of the Mosaics of Turkey*, vo. 1, Lycia, Xanthos part 1, East Basilica, Uludağ University Press, 2013, pp. 60ff. 87ff.

(8) 転用材であるこの柱礎は同じく転用材である北の柱礎よりやや大きい。大きい方の柱礎の側面を削ることで内陣の縦軸線に直交する横軸線を床上に確保し、二つの柱礎西面に差し渡しして石材を設置したものと考えられる。しかし、それが建築当初の加工であるのか、後代の加工であるのかは分からない。柱礎間を差し渡すためにかなり大きな、ないしヴォリュームのある石材を据えたと考えられることから、階段状の構造物を作るためであった可能性があり、もしそうなら、祭壇を高く設置するための基壇の石材であった可能性が高い。しかし、発掘中に、そのような大

きな石材は発見されず、また後述するように、赤モルタルによる内陣再編成時以降の祭壇は、そのような階段上の構造物ではなかったたので、もしそうした想定が当たっているなら、創建当初、ないし初期の加工であった可能性が少なからずある。

(9) 六角形のタイルは、オリジナルと思われる大理石製の薄い整った形のもと、石灰岩製の、厚い、表面のみ平滑にしたものが混在していた。すなわち、赤モルタルでこの列を作った際には、オリジナルのタイルはすでに欠乏していたにもかかわらず、この区画を六角形タイルで囲うことが裝飾上重視されたであろう。

(10) 田中咲子「トロス司教座聖堂発掘報告(二〇一二)」—聖堂裝飾(レリーフ、フレスコ)を中心に—『史苑』七三—二、二〇—三。写真は、浦野聡・深津行徳「トロス司教座聖堂発掘報告(二〇一二)」—建築上の所見を中心に—『史苑』七三—二、二〇—三。写真17-1、17-4参照。田中は、⑥については1m程度の幅にカットされたと考える根拠を明確に示していないが、鳥獸・草木文を取り囲む矩形の組紐文の結び目の位置を考察し、左のそれが右のそれと矩形の縁取りの中で同じ位置にあることから、左の矩形が右のそれと同じ大きさであったと判断する一方、横にそれが三列並んだ図案は裏面の図案を刻んだ一三〇cmという範囲をはみ出してしまいうから、⑤の図案の範囲にも鑑み、二列二段に並んだパターンを想定したものだろう。正しい判断と思われる。

(本学文学部教授)

Basilica Excavation Report, Tlos 2014: General Observation

URANO, Satoshi

ト
ロ
ス
司
教
座
聖
堂
発
掘
報
告
(
二
〇
一
四
)
(
浦
野
)

In 2014 season, 1) rubbles and soils were removed from SW area outside the basilica, 2) an inferred family tomb (in fact our inference turned to be uncertain) was opened in **Room 7** of **ST**, and 3) the *opus sectile* floor of the chancel area and NE corner of mosaic floor on the nave were excavated and conserved.

After the removal of rubbles, five rooms and one corridor (or another room) emerged in SW area to the basilica; eastern three of them (**Ch. Room 1, 2** and **3**) originally formed an oblong structure with an apse at the east end, thought to be an annexed chapel. A base of olive oil mill was found at the centre of the square shape **Ch. Room 2**, and a horse-shoe was found in the semilunar shape **Ch. Room 1**. These findings indicate that the chapel, divided into three rooms, had been converted to floors for the farm work in a later time (after the church was abandoned). **SW Rooms 1** and **2** (only part of eastern corners were recognizable just below a path for tourists) were there across a corridor or a dirt floor (**SW Path**, which forms a southwards extension of the *exonartex*) from the chapel.

A hitherto supposed family tomb in **Room 7**, divided into two parts (eastern and western), of roughly the same measurements (height 33-45 cm; widths 102 & 86 cm; length ca.160cm), brought neither human bones nor artificial material but a pair of tweezers down to the floor level where the original mosaic of the **ST** floor was found covered with a white mortar especially in the western part. These facts allude to a possibility that this was installed not for burial but for other purpose (still unspecified). More than 100 bones of rodents found within this structure point to that once here were their nests.

In the chancel area, the entire floor seems once to have been paved with *opus sectile*, as was that in the Xanthian East Basilica. Its patterns were geometric ones depicted by rectangular panels and rim-bands formed by triangle, quadrangle, hexagonal and octagonal stone tiles (white, grey, veined marbles, lime stones, black green clay slates, sometimes porphyries), though its remains were not quite a lot (except for in SE corner where patterns were well preserved).

While all over the floor was repaired with white mortars (**WM1**, sometimes with their mouldings in the shape of stone tiles), sectile tiles, bricks, large marble slabs (some with reliefs originally used as either

handrail(s) of *templon*, *sorea*, or *ambon*,) and fragmentary stone slates (even if the materials themselves were lost or removed, their negatives on bedding mortars often discernible) were almost exclusively set on red mortars (**RM**) which are seen to have been bedded no later than **PW9** and **10** had been constructed. The layer of another white mortars (**WM2**) was detected immediately under the **RM** and on *rudus* rubbles set on the other layer of yellowish white mortars (**YWM1**) bedded ca.20cm below the surface. These layers must represent earlier stages of the pavements. Pavements and their mortar bedding were extensively destroyed especially at the corners of the chancel area (except for at SE one), and in front of the apse up to the central part of the altar.

The boundary of the chancel area was marked by a U-shape line of stone slabs (thickness 25-30cm; width 48-50cm; length 90-100cm). They must have been stylobates of the *templon* rails (parapets), and later those of the *iconostasis* pillars which were found lying over each other on them in 2012 season. In a later time, **PW9** and **10**, inner sides of which is lined along those of the main pillars, were built respectively partly on the northern and southern stylobates, so that their enclosing area was smaller than that demarcated by stylobates themselves (by 40-50cm on both sides). As the extant patterns of *opus sectile* were not fitted in the latter but in the former, so they must have belonged to a later attempt to re-pave the floor. **PW10** seems to have been originally cut off at both ends to provide doorways to the **NT**, while **PW9** does not have any to **ST**. Outside and all along the western stylobates there was discovered a ditch of 30 to 50 cm width and ca.20 cm depth, meanings of which is not clear. All over on the floor fragmentary bones of goats/sheep, boars and cattle were found scattered.

The altar is characterized by its almost entire destruction and removal of its materials except for a few bricks and three kinds of mortars (**WM1**, pinkish mortars (**PM**) and beige mortars (**BM**)). Judging from its remnants on **RM**, the one prior to the last seems to have consisted of four marble panels each of which has slightly different widths from each other. As this result, they formed somewhat an irregular quadrangle, though only the front one seems to have been arranged to set symmetrically and orthogonally on the axis line.

While the two eastern column bases of *ciborion*, symmetrically installed on **WM2** (?), were preserved at their original positions, the western two seem to have been removed no later than **RM** were bedded. Greyish mortars (**GM**) were also discovered on edges of the SE column, though its stratigraphy is unclear.